

登別市では、縄文時代から断続的に人の営みが確認されており、特に近世になると、本市の一部にも拠点置きながら北方警備にあたった南部藩の人々を初めとする和人によって、先住民であるアイヌ民族の様子が断片的に記録されている。

登別市における、人の営みに関する記録は明治時代以降に増加する。

明治2年(1869)になると、戊辰戦争に敗れた仙台藩の中で白石城に居を置いた片倉小十郎家が、南下するロシア勢力から日本を守るための北門の鎖鑰(要所)たる北海道を守り、武士身分を保持しながら開拓に励んで生計を立てるため、明治新政府へ出願して幌別郡(現在の登別市にほぼ同じ)支配を命ぜられ、その主従の一部がこの登別市に移住してきた。

彼らは、先住民のアイヌ民族の力も借りながら開拓を進めたが、天候、地味の悪さ等から生活はなかなか向上せず、移住の先頭に立った片倉景範も、同じく片倉家の旧家臣団が移住した現札幌市へ居を移してしまう等、残された旧家臣らは辛酸をなめることになった。

石碑は、彼らの移住から60年近く経った大正15年(1926)6月20日に、移住者の子孫が四散してしまい、父祖の奮闘努力が没却していくことを憂えた移住者の子孫らによって、幌別郡郷社刈田神社境内に建てられた顕彰碑である。

題字の「開拓記念碑」は、幌別郡支配を命ぜられた片倉小十郎邦憲の孫で、移住者達の精神的支柱となった片倉景光の婿養子・片倉健吉(当時正五位男爵)によるもので、表面に刻まれた碑文は、北海道帝国大学総長で正三位勲一等農学博士であった佐藤昌介による。

碑文は、明治2年9月に片倉小十郎邦憲が幌別郡支配を命ぜられ、同3年に150余人が移住し、草木が生い茂り鬱蒼とし、クマやオオカミがいるこの地で開墾に従事したこと、明治10年からは片倉景光が開拓の中心となり、皆が協力して開墾を進めたことにより、人家は千を数え、良い田畑が並び盛えたこと、佐藤昌介が片倉家の旧臣らに請われて碑文を表すに至ったことが記されている。

一方、裏面の碑文上段には、明治2年9月13日に明治新政府から幌別郡支配を命ぜられた文書の写し、中段には、片倉小十郎(邦憲のこと)以下51名の移住者の氏名が記されているが、嫡子景範や嫡孫景光の名はない。また、下段には、建設者氏名として、片倉健吉以下移住者の子孫ら33名が名を連ねる。

碑石は移住者の故郷である宮城県の仙台石で、当初、碑石を支える台石には登別市内鷺別の浜の天然石が用いられ、さらにその下の石垣は、玉石が練積みされた造りだった。

しかし、風雨等による劣化で石垣と台石の損傷がひどくなったため、宮城県白石市との姉妹都市締結から20年が経過した平成15(2003)年9月に、今も登別市内に残る子孫家により台石部分が新しくされた。